

レビュー『博士の愛した数式』

微小時間の無限大

80分しか記憶がもたない数学者は、その人生にいったいどのような希望がもてるのだろうか？

小川洋子氏の小説「博士の愛した数式」の映画版は、原作に基づきながらも、多くの脚色を加え、よりよく映像化された作品に仕上がっている。主人公は、交通事故で脳に後遺症をもち、80分前の出来事までしか覚えられなくなってしまった数学者。かつては大学での研究職についていたが、いまでは数学雑誌の懸賞問題への寄稿を趣味として余生を送っている。その彼のもとに、身の回りの世話をする家政婦として派遣された未婚の母の杏子。やがてその息子のルートも加わった奇妙な関係の3人に、数学と野球を通じた心の触れ合いが始まる。

およそ小説（ロマン）にしても、また数学にしても同じであると思うが、与えられた設定の善し悪しというものは、その仮定からどれだけ内容豊かな世界が広がっていくかによってのみ決まる。現実にはありえない物語でも空間でも、それは何ら問題ではなく、むしろ大切なのは、描きたい主題を導くための適切な設定になっているか、そしてその過程が十分な説得力をもって展開されているかどうかという点だけである。したがって、たとえば、高校時代に出会った転校生との短い青春の日々を一生想い続けて生きていくという主題のためには、死んだと思っていた彼が、実は過去の記憶を無くしただけであり、別人として再会して心が揺れるという設定は十分に効果的なのである。では、80分しか記憶が続かない数学者という設定からはどのような主題が帰結できるのだろうか？その問題を考える前に、本作品の印象をいくつか紹介してみたいと思う。

まず第一に感じることは、映像そのものの透明感である。季節は早春、撮影場所は信州である。風景は光に満ちているのであるが、決して霞がかかった白さではなく、空気や水の凜とした透明な明るさが美しく表現されている。博士が住む別荘にも似た古風な家屋は、内部の色彩感がまた印象的である。キッチンの清潔感が木製の家具とのバランスをうまくとっている。戸外の光りが明るく窓から差し込んでいるなかで、それぞれの調度品は自らが柔らかい光を発しているように存在し、部屋全体に透明な空気を漂わせている。このような舞台の中で演じる役者たちもまた自然体である。家政婦杏子役の深津絵里を形容する言葉が透明感であることに同意していただければ、この意味は容易に想像できると思う。

第二に、映画の随所に現れる象徴的な言葉、フレーズである。そのいくつかは原作の中にもあり、いくつかは映画版で新たに創作されたものである。博士が杏子の息子のルートに「初めて」会う場面。博士はルートに会った記憶をなくすため、それは幾度もあるのであるが、その度に博士はルートの頭をくしゃくしゃに撫でて「賢い心がつまっている頭だ」と言う。理性と感性、論理と情緒は相反するものではなく、むしろ互いに他を増幅させる関係にある。賢い心とはその関係を想像させる表現として感じられる。

杏子が博士を散歩に連れ出す場面。早春の野原で、博士が杏子に数学に最も近い仕事は農業であると説明する。土地を選んで耕す。種を蒔いて育てる。数学者もフィールドを選び問題を考える。しかし、それが大きくなる力は種のほうにある。この言葉の原典は数学者岡潔の「春宵十話」の中にあるのであるが、本作品の小泉監督は以前から春宵十話に親しんでいたようで、その印象がこの部分に挿入されているのであろう。

ルートが怪我をして運ばれた病院の待合室で、博士が杏子に数学上の概念である「直線」について語る場面。紙に書いた直線は本当の意味での直線ではないと言う。とりあえずの線分を本物と了解しているに過ぎない。では、真実の直線はどこにあるのか？それは心のなかにしかない。物質にも感情にも左右されない永遠の真実は目にみえない。肝心なことは心でみること。そして目にみえない世界が目に見える世界を支えているのだと。

そして映画の最後に流れるウィリアム・ブレイクのソネット *Auguries of Innocence* の冒頭の一節。「手のひらに無限をのせ、一時のうちに永遠を感じる」と詠う。

To see a world in a grain of sand,
And a heaven in a wild flower,
Hold infinity in the palm of your hand,
And eternity in an hour.

博士と杏子とルートは一瞬一瞬にどのような永遠を感じたのであろうか？

本作品では随所で数学の結果を説明する会話がなされているが、物語の背景として数学という学問が選ばれていることは偶然や単なる作者の趣味というだけではないだろう。数学は普遍的な真理を探求するものであると人は言う。数学的真理の普遍性は時代や場所をあらゆる意味で超越し、ときには人間の存在すら無関係に実在すると感じられることもある。博士がその短い瞬間に人生の輝きを感じ、杏子とルートがその想いを共有しようとする対象としては、数学以外を設定することは難しかったように思う。もちろん、実際に作品の中で語られる具体的な数学的内容については、それを専門に勉強したことのある人から見れば面映い点多々あるであろう。それらを指摘して楽しむという映画の見方も否定はしないが、残念ながら私には興味がない。私がこの作品における数学についての感想は、それが物語の通奏低音として適切に流れているということのみである。

逆に私が興味をもったことは、博士の杏子やルートに対する愛情と、昔慣れ親しんだ未亡人である義理の姉に対する感情の描き方の違いである。博士は幼い子供に対して限りない慈しみの情を寄せる。それはまた自分のまわりにいる人に対しても同じで、杏子とルートの親子が幸せでいてもらいたいと思う気持ちがあらゆる場面で発露している。それに対して、義姉との関係については過去のこととして封印され、博士側からの感情の現れはない。前者の感情が博士のすべての瞬間の中に存在するのに対し、後者が瞬間を生きる博士の中から消去されているのはなぜであろうか？

一時のうちに無限を感じるという点に関しては恋愛感情も同じである。思うにしかし、そこに現れる無限の質というものが違うのではないだろうか？たとえばウェルテルは「千年たったからといって、あの印象を消すことはできないんだ」と言う。そこにはどんなに長い時間が与えられたとしても、それよりも長く今の感情を持ち続けていくだろうという確信が込められている。これこそが恋愛場面で表現される無限の本質であって、それは記憶の継続を前提として初めて可能になる意識なのである。80分の記憶しかない博士の今にどうしてその感情が湧き起ころうか。

無限の有限化が数学の目的であると言うならば、逆に瞬間の永遠化が人生の目的であると言うことができるだろう。その永遠とは、過程としての無限ではなく、いま実存する無限である。瞬間に感じる永遠の思いこそが人生の意義に昇華していく。そして、この作品の中で描かれている永遠とは、心が触れ合う人たちの幸福を願う普遍的な人間性である。博士に与えられた80分という瞬間は、様々な猥雑物を振り分けて、純粹にこの部分に焦点を当てているように思う。その意味において、本作品の奇妙な設定は十分に成功し、見る人に共感をもって優しい気持ちが伝えられたとを感じるのである。

あとがき：11月25日夕方、お茶の水女子大学講堂（徽音堂）にて、映画「博士の愛した数式」の試写会が理学部数学科の主催、アスミックエースエンタテインメント（株）の協力にて行われた。当日は約1000名の入場者があり、大盛況であった。上映後、小泉堯史監督、主演の寺尾聰氏および藤原正彦教授による討論会も開催され、この映画に関する感想を聞くこともできた。本文のいくつかの内容は、このとき聞いた話を参考にしている。